

宮崎英修先生の想い出

上 田 本 昌

想いおこすと大分昔のことである。昭和二十六年の春、立正大学の宗学研究室で、望月欲厚教授から課せられた「観心本尊抄」を拝読していると、宮崎英修先生が野村耀昌先生と入ってこられた。お二人とも当時は助教授で張り切っておられ、われわれ学生を元気に指導して下さいました。

二十八年卒業が間近かに迫った頃、「上田君、当然大学院へ残るんだろう？」と宮崎先生が親しく声をかけて下さった。まだその頃は大学院もできて間もない頃であったが、意を決して修士課程へ進むべく試験を受けた。個性豊かな「名物先生」も数多くおられ、授業は苦しくも又楽しかった。

宮崎先生の初期の著作「波木井南部氏事跡考」を通読したことなどが夢のように感じられる。またたく間に月日が流れ去り、先生との懐しい想い出は書き尽したいものがあるが、その中でも日本仏教学会の学術大会が開かれたあと、夕食会では「懇親会の正会員として、皆さんしっかり飲んで、大いに英気を養って下さい。」と挨拶され一座を湧かせたこともあった。

身延山短大（当時）の学頭として、里見泰穂先生選化の後を受け継ぎ登山して来られた頃は、立正大学を定年退職されたとはいえ、まだまだお元気で、久遠寺内の寮生活が私達執事と共に始まった。たまたま当時布教部長をしていた私の部屋のお隣りへ入ってこられたので、爾来永いおつき合いがまた始まった。

「身延山で宗祖のおそば近くに寝起きさせて頂いて、朝夕お仕えできることは、この上ないありがたいことです。」といわれた通り、毎朝必ず勤行に出仕され、学生に範を示しておられた。寒風吹きすさぶ時も、一番早く旧書院の廊下に並ばれて、法主猊下のお出ましを待つておられたが、そのお姿には頭のさがる思いであった。

短大から四年制へ、改組転換のときも、初代の学長として、教職員を督し、大変な苦勞を重ねられた。その甲斐あって永年の夢が実現し、無事四年制の大学となった。同窓会の諸師にも大いに協力して頂き、悦びをわかち合うことができた。

或る時、宗宝調査で上沢寺へ委員の先生方とこられたことがあった。什物の箱の中から何点か順次見ていかれたが、

「上田先生、どうして像師のこんな立派なご本尊が、このお寺に伝わっているのかね？。これは特に大切にしてくださいよ。」

といって、その場で登録されていかれたことがあった。

また先生の奥様・宮崎慈子さまが俳句を作つて、日蓮宗新聞の「俳壇」に一時期よく投句してこられたことがあった。その関係で先生も俳句に理解を示しておられた。久遠寺では朝勤が済むと、出仕した役僧が一同で総務寮へ戻り、朝礼のあと朝茶をいただくことになっている。或る朝、たまたま俳句に話に及んだとき、

「三省堂から出ている『歳時記』に、例句として上田先生の句がのっているんですよ。この『歳時記』に句がのるといふことは大変なことなんです。」

といつて皆さんに披露し、いたくほめて下さつたことがあった。

先生は在職中も最後までよく頑張られた。勸学院の院長として、宗務院での会議には責任を持って必ず出席された。晩年体調を崩されてからも、奥野本洋先生に付添ってもらって上京し、その任を果された。その時のお姿に接し全く感服させられた次第であった。

こうした気性のしつかりした先生を失ったことは、大変な損失であると考えられる。語り尽せぬ思い出の中から、その一端を回想しつつ追悼の意を表する次第である。

在りし日の慈顔偲ぶや盆の月 正久日

(仏教学部教授)